

[学校ヘルスケア]

知識・理解を超えた先にある子どもの姿を目指して

－自己の在り方・生き方を深めるがん教育の実践－

中村 千穂*

1 はじめに

(1) がん対策に関する国の取組

現在は2人に1人ががんにかかる時代といわれている中、「がん対策基本法（平成18年法第98号）」の下、国が策定したがん対策推進基本計画（平成24年6月）において、「子どもに対しては、健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識をもつように教育することを目指し、（中略）教育活動の実施を目標とする」とされた。それに伴い、平成30年度より、学習指導要領の改訂に基づき、がん教育が導入されている。

(2) がん教育の定義と目標

文部科学省が定めるがん教育の定義は、「がんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育」である。また、同省は「学校におけるがん教育の在り方（報告）」¹⁾において、学校におけるがん教育の目標を下記のように示している。

【がん教育の目標】

・がんについて正しく理解する

がんが身近な病気であることや、がんの予防、早期発見・検診等について関心を持ち、正しい知識を身に付け、適切に対処できる実践力を育成する。また、がんを通じて様々な病気について理解を深め健康の保持増進に資する。

・健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする

がんについて学ぶことや、がんと向き合う人々と触れ合うことを通じて、自他の健康と命の大切さに気付き、自己の在り方や生き方を考え、共に生きる社会づくりを目指す態度を育成する。

このことから、がん教育とは単に知識を学習するにとどまらず、学んだ知識を目標達成に向けて深め、発展させ、自己の在り方・生き方を考えさせるまでの教育を実践することに価値がおかれていると筆者は捉えた。

(3) がん教育の現状と課題

① 現状

文部科学省が実施したがん教育の実施状況調査²⁾によると、がん教育を実施した学校は、国公立37,169校中、23,023校（61.9%）であった。内容は、がんとはどのような病気か（86.0%）、がんの予防（84.8%）、我が国におけるがんの現状（62.0%）、がんの早期発見とがん検診（46.7%）の順に多かった。また、がん教育を扱った教科は、圧倒的に体育・保健体育の授業が高い比率を占めていた。

② 課題

ア 「がんを経験している人への正しい認識をもたせる」ための教え方の検討

上述した調査において、がん患者への理解と共生の内容を取り扱った学校（17.9%）はあったが、本来目的とされていた「がん患者に対する正しい認識をもつように教育すること」についてはどのように取り扱われているのか明らかにされていない。同調査の結果から森口³⁾は小児がんについて取り上げ、小児がんは生活習慣とは関係なく特発的に発生するものであり、生活習慣が「がんの要因」であると教えられた場合、がん治療を行った子どもに対して「生活習慣を守っていなかった」という偏見の目を向けられる懸念を述べている。しかし、これは小児がんに限ったことではなく、大人のがんであっても同様に言えることである。国立研究開発法人国立がん研究センター⁴⁾によれば、がん発生について、原因が不明とされるがんは全体の6割を占める。このような背景があるなかで、杉崎⁵⁾⁶⁾も、がん患者への認識に

*新潟市立曾野木小学校

ついて、がんを学ぶことで（がん患者への）偏見を助長する可能性があることを示唆している。そして「『がんにかかった人＝生活習慣が悪かった人』という短絡的な理解に陥らないように指導の工夫をしていかなければならない」と述べている。

イ 道徳との連携・内容の検討

がん教育の二つの目標に照らし合わせれば、がん教育は、特別活動や道徳科、総合的な学習の時間などを中心に教育活動全体での実践を通しての追求が求められている⁷⁾。

天野⁸⁾は、道徳教育とがん教育の目標には合致する部分が多いことを示し、がん教育の推進において道徳科への期待が大きいことを述べている。学校における道徳教育は、自己の生き方を考え主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育活動であり、社会の変化に対応しその形成者として生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割を持っている⁹⁾。がん教育推進における道徳科との連携の効果が期待されるなか、文部科学省が実施したがん教育の実施状況調査²⁾において道徳科の授業でがん教育を行った学校は、小学校では2.1%、中学校では2.4%と非常に少ない比率であったことから、がん教育推進に向け、道徳科との連携を検討することは意義があると考えられる。また、先行研究^{3) 7) 8)}では、道徳科におけるがん教育において命の大切さや身近にがんという病気を経験している人がいた時に、どのように接することがよいのかという視点から考えさせる内容が多くみられる。しかし、がん教育では「がんは、誰もが経験する可能性のある病気である」ことを学習する。がんという病気を経験している人に何かをしてあげるという視点でなく、自分ががんを経験する立場にも誰かの闘病を支える立場にもなることを見据え、視野を広げ、最終的には子どもが自己の生き方を見つめることができるような道徳科の指導内容の検討が必要ではないかと考えた。

2 主題設定の背景と研究の目的、仮説

(1) これまでの自校の取組における課題

① 特別活動と道徳科のユニット教材開発について

6学年の体育科保健領域「病気予防」の章で取り扱う「生活習慣病の予防」「喫煙の害と健康」「飲酒の害と健康」「地域の保健活動」の単元でがんの予防や早期発見に関わる学習をする。それにも関わらず、学校で「がん教育」が改めて導入されたのはなぜかと考えた時、生活習慣やがん検診に焦点をあてたがん対策を学習するだけでは補えない知識や倫理観なども含めて育成することが求められているのではないかと筆者は考えた。そこで、令和元年度に勤務していた小学校でがん教育の立ち上げに関わり、体育科保健領域とは別に、がんについて正しく学ぶ特別活動と、健康と命の大切さについて主体的に考える道徳科をユニット化した教材開発を行った。しかし、本教材を使用する中で以下の課題が浮かび上がり、改定の必要を感じるに至った。

② がんの知識を学ぶ特別活動における板書についての課題

これまでのユニット化した教材内の特別活動における実践では、がんは非感染性疾患であることや対策をとっていても起こることがあるなどの留意事項は口頭説明とし、板書は行ってこなかった。先行研究¹⁰⁾では文章を視覚と聴覚で提示した場合の記憶への影響について、聴覚提示よりも視覚提示は記憶の低下が認められなかったことが示されており、板書（視覚化）する内容は子どもの記憶に残りやすいといえる。しかし、がんの知識を学ぶ「特別活動」においては、基本的ながん対策と矛盾する内容を板書することで子どもたちの理解が混乱しないかを危惧した。それ故、これまでの板書を振り返ると基本的ながん対策のみの学習にとどまっていると捉えられてしまうものであった。そして、次時に控えていた道徳科の授業では、がんという病気について「うつるかもしれない」という言葉が子どもから出されることがあり、その場で正しい知識に訂正し直すことがあった。しかし本来は、がんは非感染性疾患であることに加え、基本的な対策を行っていても必ずしもその通りにはいかないこともあるということも含めて知ることこそが「正しく知る」ことであり、板書（視覚化）による子どもへの影響力を生かす方法を検討する必要があると考えた。

③ 道徳科の内容と指導の観点に関わる課題

道徳科におけるがん教育については、これまで、指導の観点をC-(13)「公正、公平、社会主義」に焦点化し、がんという病気を経験している人への偏見や差別を生まないことを中心に考えさせる授業を行っていた。しかし、先述の通り、内容を検討し直し、指導の観点をD-(22)「よりよく生きる喜び」に変更して授業を構想することとした。この内容項目には、これまでの指導の観点としてきたC-(13)「公正、公平、社会主義」の観点も含めることができるうえ、思考を広げ自己の生き方そのものを考えさせる構想が可能となると考えた。

(2) 目的及び仮説

そこで、以下の仮説を立て、「正しく知る」「正しく認識する」ことを指導の前提に据え、知識・理解を超えた先にある、子ども自身がこれからの自己を見つめ、どう生きていくのかといった自己の在り方・生き方までを深められる子どもの姿を目指して実践を積み重ね、がん教育のさらなる発展に少しでも寄与できることを目指し本研究を行った。

- ① ユニット教材の特別活動においては、偏見や差別につながる可能性のある誤った知識を与えないように、がんは非感染性疾患であることや対策をとっていても起こることがあるなどの留意事項について板書（視覚化）し、子どもに理解を深めさせることで、がんを経験している人への正しい認識をより確実にもたせることができるであろう。
- ② 道徳科においては、これまで、指導の観点をC-(13)「公正、公平、社会正義」に焦点化していたが、指導の観点をD-(22)「よりよく生きる喜び」に変更することで、実際にがんを経験した人の言葉を通して、子どもが幅広い視野をもち、自己の在り方・生き方を見つめることのできるがん教育が可能となるであろう。

3 実践の概要（本実践は令和6年度に実践）

(1) がん教育を行う上での留意点

- ① 偏見や差別につながる可能性のある「誤った知識」・「誤った認識」を与えないこと

がんは非感染性疾患であることを確認した。また、「がん罹患＝生活習慣がよくない」、「がん罹患・進行がん＝がん検診を受けていなかった」という誤った知識・認識を与えないようにした。

- ② 要配慮児童を把握すること

事前調査で要配慮児童（小児がんの既往、家族や身内ががんで闘病中、家族や親しい人をがんやその他の難病等で亡くしている、など）を把握し、保護者の意向を確認し、管理職と学年の職員と養護教諭で配慮方法を検討した。

- ③ 本実践で学習する全児童に配慮すること

ア 授業を受けない選択や途中退室ができることとした。

令和6年度は該当児童なし（令和4年度には、自己選択により特別活動の授業を受けない児童が1名いた）。

イ 「意思表示カード」を活用する…通常は表面の黄色にし、何かあれば裏面の赤にすることとした。

令和6年度は該当児童なし（令和元年度には、祖父について家族全員でがん告知を受けて間もない時期であった児童が、意思表示カードの黄色面を鉛筆で黒く塗りつぶす等精神的に不安定になったことから、担任によるサポートを受けた）。

ウ 保護者が自由に参観できることとした。

保護者から授業参観をさせてほしいという希望があり、がん教育発展に向け、誰もが安心して受けられるがん教育を目指すために自由参観とした。令和6年度は参観者数は8名（特別活動6名、道徳2名。特別活動では、がん教育直近でがんで父親を亡くした子どもの母親が参観していた）。

(2) がん教育のユニット単元について

- ① 単元のねらい（目指す子どもの姿）

がんという病気について、「正しく知る」「正しく認識する」ことを通して、適切な健康行動の選択にとどまらず、正しく知ったことを、人権を守ることや周りの人へ伝えていくことなど、広い視野から自分たちにできること（在り方）を考えることができる。さらに、実際にがんを経験した人の言葉を通して、これからの自分がどう在り、どう生きたいかまで考えを深めることができる。

- ② 単元名 がん教育（全2時間） 実施学年 6年生（5クラス、児童数173名）

特別活動（1時間目） 授業者：養護教諭	「がん」という病気を考える ～正しく知る、そして、動く～
道徳（2時間目） 授業者：担任	内容項目 D-(22) よりよく生きる喜び 困難を乗り越えて生きる ～「がん」を経験した人の言葉を通して考える～

(3) がん教育（特別活動）学習指導案の概要

- ① 題材名 「がん」という病気を考える ～正しく知る、そして、動く～

- ② 本時のねらい

「がん」という病気について、「がん」という病気の正しい知識を学ぶことを通して、「がん」という病気に対して自分たちができることをヘルスリテラシーを発揮して考えることができるようにする。

らこそ気が付いたこと、困難なことに向かう時に大切だと思うこと等をインタビュー形式で語っていただいている。最後には、「子どもたちへのメッセージ」が込められている。

③ 本時のねらい

困難（病気）に直面した時にどのようにそのことに向き合っていくことが大切なのかについて、白血病を経験したプロサッカー選手の生き方・考え方に触れ、何が選手を支えたのかを考え、話し合うことを通して、自己の在り方・生き方を考える。

④ 活動の実際

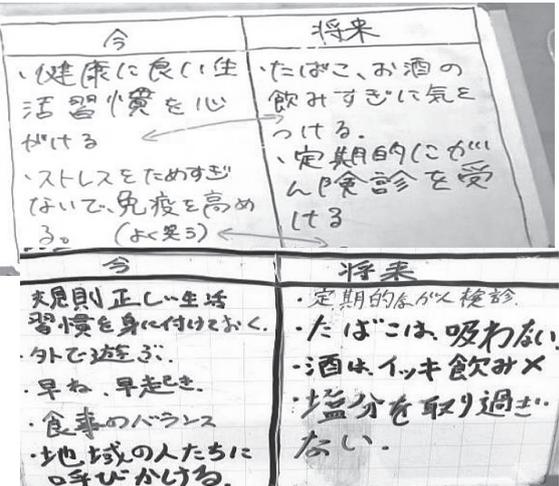
自作動画教材をもとに学習を進めた。選手がどのように困難（病気）に向き合っていたのかをグループで話し合い、子どもたちは、自作動画教材を通して、がんという病気を経験した選手の言葉やメッセージを聞いた。

4 結果と考察

(1) 結果

① 特別活動における子どものグループ活動における記載から

「がんという病気に対して、自分たちができることは？」という問いに対して、子どもたちが話し合い、力を合わせ以下のようなことを表現した。

<p>令和5年度の子どもの記載：留意事項の板書 なし</p>	<p>令和6年度の子どもの記載：留意事項の板書 あり</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>正しい知識を知って、予防をした り行動に移す事 が大切だと思う。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>笑顔でいることが がんと予防すること につながるの で周りから笑顔が 消えるような行動 をなるべく避ける</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> <p>自分だけががんの正しい知識を知るんじゃなくて、周りの人にもがんの正しい知識を教えあげたりすることが大切だと思った。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>がんになってしまった人のことを差別したりしないで、その人の気持ちを受け止めて、自分のできることを聞いたりしてその人に寄り添ったり、寄り添う気持ちが大切だと思った。</p> </div>

がんという病気の正しい知識を学ぶことに加えて、がんは非感染性疾患であることや対策を取っていても起こることがあるなどについて板書（視覚化）し子どもに理解させたことで、令和5年度に実施した授業時の子どもの記載に比べて、令和6年度の授業時の子どもの記載の方が、がんを経験している人に対して、がん患者に対して偏見なく接し、自ら取り得る行動について触れられたものが多かった。

② 道徳科における子どもの振り返りから

<p>令和5年度 内容項目C-(13)「公正、公平、社会主義」 教材：がん教育読本「ぼくとゆうくん」</p>	<p>令和6年度 内容項目D-(22)「よりよく生きる喜び」 教材：自作教材</p>
<p>身近にがんと闘っている人がいた時、特別扱いせず、でも困っている時は助けられるようにする。相手にとっては、「かわいそうと思われている」と感じさせてしまうかもしれないし、自分でできることかもしれないので最初に「手伝ったほうがいい？」と聞くようする。</p>	<p>A選手はメッセージ動画の中で、自分がしてきたことより、仲間たちがしてくれたことを中心に話していた。A選手は、とにかく仲間へ感謝し、仲間を大切にしていたのだと思う。ぼくも、何かあった時、まわりに支えてもらえる自分でいたいし、まわりに頼られる自分でもいたいと思う。がん教育で学んだことを、これからの当たり前ではない日常生活で生かして、この知識をもっと広めていきたいと思った。</p>
<p>「がん」はうつらないということがわかりました。正しい知識を知ることは、差別や偏見をなくすために大事だと思います。</p>	

がんでもがんじゃなくても〇〇だからこうするとかではなく、平等に接することが大切だと分かりました。

がんはうつる病気ではないから、がんを患っている人がいてもいつも通りに接することが大切だと思う。

人に流されずに自分を見失わないことが病気に立ち向かうためにも必要だし、学校での生活でもとても大事になってくると思う。自分だけを見るのではなくしっかりと周りを見たらうえで、周りの仲間や家族、たとえ知らない人でもしっかりと支えることを学校や普段の生活でも活かし、強く前向きに生きていきたい。

令和6年度の道徳科での授業では、ねらい（内容項目）を「D-(22)よりよく生きる喜び」として、白血病を経験したプロサッカー選手のインタビューやメッセージ動画をもとに、選手の生き方・考え方に触れ、何が選手を支えたのかを考え話し合うことで、子どもたちの振り返りには、自らの経験をもとに、がんについても今後の自身の生き方についても、令和5年度に実施した時よりも、未来志向で力強い思いが記されるようになった。

(2) 成果

本実践では「正しく知る」「正しく認識する」ことの理解が既にあることが前提の中で、2時間目の道徳科に臨む構想とした。令和5年度までの実践では、正しく知ることや、がんを経験している人の人権に関わることは、2時間目の道徳科で子どもたちが気付きを得るものだった。しかし、特別活動でがんという病気についての留意事項を板書（視覚化）したことで、1時間目の特別活動の段階で、正しく知ることやがんを経験している人の人権を守る重要さが印象付けられたと推察される。それにより、2時間目の道徳では、D-(22)「よりよく生きる喜び」の指導の観点のもと、がん教育を通して得た、知り、気付き、考えたことを日々の言葉や行動（在り方）、そして生き方に反映させようとする姿が子どもの振り返りから窺うことができた。これを知識・理解を超えた先にある子どもの姿と筆者は捉えた。また、特別活動と道徳科という二つの教科をユニット化して単元構成ができたことも成果の一つであると考えられる。

(3) 課題

本実践では生活習慣とは関連性が低いとされ、そして「がん検診」という形のスクリーニング検査はない「がん（白血病）」に触れている。それは、生活習慣が原因とされるがんや、がん検診で早期発見につながりやすいがんのみに焦点を当てて取り扱うことは、本来のがん教育の目標から逸れてしまうことで、子どもたちの中でがん患者への偏見や差別につながる心情が生まれてしまう可能性があると考えたからである。しかし、このことについて、生活習慣が原因とされるがんや、がん検診受診率上昇につなげやすいがんを取り扱うべきではないかという意見をいただいた。今後、がん教育の発展に向け、いただいた意見を検討していく必要があるが、がん教育はがん対策の基本事項を押さえればそれでよいということではないことを多くの実践者と一層共有し、本来のがん教育の目標に立ち帰り、本実践の改善に努めていく。

5 謝辞

本実践は、当時の勤務校での上司や同僚、がんを経験され今も病気と闘っているプロスポーツ選手や関係者、その方たちとの縁を繋いでくださった研究同人など、多くの方々のお力添えがあったことである。そして何より、がん教育を受け入れ、真剣に学習に向き合ってくれた子どもたちや保護者の皆様に心から感謝申し上げたい。

6 引用文献

- 1) 文部科学省「学校におけるがん教育の在り方について（報告）」2015年。
- 2) 文部科学省「平成30年度におけるがん教育の実施状況調査の結果について」2018年。
- 3) 森口清美「がん教育の現状」育療 71巻 pp43-47 2022年。
- 4) 国立開発研究法人国立がん研究センター がん対策情報センターがん情報サービス（一般の方向け）更新2024年6月21日 <https://ganjoho.jp/public/index.html>（閲覧日2025年8月18日）。
- 5) 杉崎弘周「フロントライン教育研究 子どもの実態に関する研究を踏まえたがん教育 文部科学省編：初等教育資料令和2年8月号 東洋館出版社 2019年。
- 6) 杉崎弘周「子供の実態に関する研究を踏まえたがん教育」新潟医療福祉大学教職センター年報（5）pp1-3 2021年。
- 7) 村松勇介「『特別の教科 道徳』の教科書教材と授業展開に関する一考察：小学校『生命の尊さ』項目に教科書教材分析をてがかりに」高度教職実践専攻（教職大学院）典要 3 pp135-146 2019年。
- 8) 天野幸輔「がん教育と道徳科の授業の連携の可能性」名古屋学院大学論集人文自然科学篇 第57巻第2号 pp55-82 2021年。
- 9) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科道徳編」東洋館出版。
- 10) 滝田亘 中山実「視覚と聴覚による文章の提示と記憶への影響」日本教育工学雑誌27巻suppl号 pp81-84 2004年。